

Light and Shade in Japanese Culture

日本文化の明と暗

近畿大学日本文化研究所 叢書 九

近畿大学日本文化研究所編

Light and Shade in Japanese Culture

ht and Shade in Japanese Culture

大学日本文化研究所 編

本文化の明と暗

装幀／安起瑩

日本文化の明と暗

2014 年 3 月 20 日 第 1 刷発行 (定価はカバーに表示してあります)

編 者 近畿大学日本文化研究所

発行者 山口 章

発行所	名古屋市中区上前津 2-9-14 久野ビル	風媒社
	電話 052-331-0008 FAX052-331-0512	
	振替 00880-5-5616 http://www.fubaisha.com/	

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
ISBN978-4-8331-0565-1

*印刷・製本／モリモト印刷

日本文化の明と暗／目次

I 島の磁場

1 記紀における「根の国」とはいかなる国か

記紀における《母権的価値体系と父権的価値体系との文化抗争》 清眞人——8

2 大島紬にみる伝統の消失と再生 関口千佳——34

3 「戦後」という日本社会の歴史認識

海南島の住民虐殺と沖縄の強制集団死との結び目から見えてくるもの 斉藤日出治——47

4 バリとフクシマ モビリティ・スタディーズの新たな転回に向けて 吉原直樹——73

II 対論の渦

5 消費組合論争史の明暗 堀田泉——90

6 エリート主義否定の社会 日本社会に見るその可能性 鈴木伸太郎——111

7 企業文化の明と暗 日本の雇用システムと教育システムの相互補完関係 浅野清——140

8 西洋のロゴス、日本の言霊 言語思想における根源的なものへの憧憬 山取清——159

III 歴史の堆積から

9 熊野比丘尼(寺)の後胤 美濃国祐勝寺をめぐる 根井浄——188

10 御鏡師中島伊勢と北斎 家業不器用に付き廃嫡? 岸文和——203

11 啓蒙主義の光と陰 西洋の普遍的理性と東アジア社会の葛藤 高坂史朗——223

12 橋川文三私見 網澤満昭——240

Light and Shade in Japanese Culture

ht and Shade in Japanese Culture

大学日本文化研究所 編

本文化の明と暗

日本文化の明と暗／目次

I 島の磁場

1 記紀における「根の国」とはいかなる国か

記紀における《母権的価値体系と父権的価値体系との文化抗争》 清眞人——8

2 大島紬にみる伝統の消失と再生 関口千佳——34

3 「戦後」という日本社会の歴史認識

海南島の住民虐殺と沖縄の強制集団死との結び目から見えてくるもの 斉藤日出治——47

4 バリとフクシマ モビリティ・スタディーズの新たな転回に向けて 吉原直樹——73

II 対論の渦

5 消費組合論争史の明暗 堀田泉——90

6 エリート主義否定の社会 日本社会に見るその可能性 鈴木伸太郎——111

7 企業文化の明と暗 日本的雇用システムと教育システムの相互補完関係 浅野清——140

8 西洋のロゴス、日本の言霊 言語思想における根源的なものへの憧憬 山取清——159

III 歴史の堆積から

9 熊野比丘尼(寺)の後胤 美濃国祐勝寺をめぐる 根井浄——188

10 御鏡師中島伊勢と北斎 家業不器用に付き廃嫡? 岸文和——203

11 啓蒙主義の光と陰 西洋の普遍的理性と東アジア社会の葛藤 高坂史朗——223

12 橋川文三私見 網澤満昭——240

I

島の磁場

清眞人

1 記紀における「根の国」とはいかなる国か

記紀における《母権的価値体系と父権的価値体系との文化抗争》

神々の名称表記について、周知のように同一の神が古事記と日本書紀では表記が異なっている。本論文では、問題となる神が最初に登場したさいに両方の表記を示し、以降は古事記における表記で一貫することにする。

一 問い

——はたして「根の国」とは「黄泉國」なのか？

従来、次の通説がまかり通ってきた。少なくとも私の知る限りでは、その通説に疑義を唱えその是非を真正面から検討した議論はほとんど話題に上ったことはない。日本民俗学の創始者に目される柳田國男や折口信夫の繰り広げた議論にあっても、また最近の注目すべき溝口睦子の『アマテラスの誕生——古代王権の源流を探る』にあっても、通

説に対する疑義が出され、本論がこれからおこなうような明確な問題設定がおこなわれてはいない。

通説とは次の解釈を指す。

すなわち、記紀の最初の部分、つまり創世の神話が扱われる「神代上」の部分において「根の国」という国名が登場し、これが火之迦具土神（火神軻遇突智）の出産の際に陰部に重い火傷を負うことで死に至った伊邪那美（伊弉冉）が下ることになる、死骸の腐りゆくさまをあからさまにする「凶目き汚穢き處」、死穢にまみれた黄泉の国を指し、その別名であるとする解釈である。

しかしながら、日本書紀ならびに古事記を詳細に検討するならばこの通説は根拠がないことが明白となる。

古事記においてはこの死穢の国が「黄泉國」と名付けられていることは明白であるが、しかし、この「黄泉國」がこの国を直接記述した箇所と同時に「根の国」と呼び換え

られているというようなことは実は全然ない。また日本書紀でも同様に「黄泉よみつくにに入りて」とあるが、そこでの記述に「根の国」の呼び名は登場しない。岩波書店刊行の日本古典文学大系の『日本書紀上』はその「補注1—四〇 根国」において「根国」という国名が登場する箇所は日本書紀では十一例あるとし、かつその例で示される「根の国」の表象の特徴を分析しているが、この十一例からくだんの「黄泉の国」の記述箇所は除外されている。これは当然であって、事実、記紀両書においてかの伊邪那美の下った「黄泉國」はけっして「根の国」と同定されていないのである。

しかし、通念的解釈においては両国は同一であるかのごとき理解がまかりとおっていたし、また研究者からそうした理解に対する文献に即した厳密な批判的検討の必要性が強く主張された痕跡も——少なくとも私の知見の範囲ではない。

一例を引こう。

柳田國男に次の有名な指摘がある。それは沖縄・奄美のニライカナイ・ネリヤカナヤ信仰に直にかかわっているものだが、彼は『海上の道』のなかでこの信仰のなかでの「根の国」についてこう語ったのである。

「稲といふ穀物の根原がニルヤに在り、之を繁茂せしめて人間の力と幸福とを、豊かにすることが本来の機能であったのかも知れず、言はば南島の根の国が、単なる亡者の隠れ行く処であるに止まらず、絶えず是から流れ出て、現世を楽しく明るくするものの、爰が主要なる源頭であることを、嘗て我々は南北共に、信じて居た時代があったのでは無い(3)か」(傍点、引用者)と。

この彼の指摘は、記紀に登場する「根の国」の原像(まさに「源頭」)は実は古代日本に土着する「海洋的世界観」(溝口)から誕生してくる「常世国」信仰——沖縄・奄美のニライカナイ・ネリヤカナヤ信仰がそのいまに残るものとも鮮やかな姿であるところの——にあり、「根の国」をくだんの「凶目き汚穢き處」たる黄泉の国と同定することへの疑義を孕むものであるが、しかし同時に、記紀の上梓された「北」部日本(つまり、大和朝廷支配地域ということになる)では「根の国」が「単なる亡者の隠れ行く処」つまり黄泉の国と同定されていたと、柳田も認識していたことを示すものでもある。彼自身が記紀をそう解釈したかどうかまではこの一節だけでは判定できないが、そうした同定が通念となっていたと彼が認識していたことは明らかにであらう。

なお、私は次のことを付け加えておきたい。すなわち、柳田はこの彼の視点から出発してかかる同定の是非を記紀の文言に密着して記紀自体に問いかける分析作業——当然それは記紀自体がこの同定の視点に立つものであるか否かの検討を含む——には進まなかったことを。

ではなぜ、かかる同定が通念的解釈となったのか？

おそらくそれは、記紀における次の有名なくだりに出てくる「根の国」が、十分なる批判的検討抜きに先の伊邪那美の下った「黄泉國」を指すものとして受け取られたことによる。そのくだりとは、泣き暮らすばかりで父の伊邪那岐（伊弉諾）が命じた国政（海の統治）を放棄している須佐之男命（素戔鳴尊）を伊邪那岐が叱責するや、彼は「僕は妣の国根の堅洲国に罷らむと欲ふ。故、哭くなり」と返答したという有名なくだり、および彼が姉天照大御神に「吾は元黒き心無し〔略〕永に根国に就りなむとす」と述べる箇所である。

これらの文言から、くだんの「黄泉國」の一件が振り返られ、伊邪那美が「黄泉國」の住人となり、結局伊邪那岐と離別するに至った事態は、そのまま須佐之男命にとって「黄泉國」が「妣の国」となったことであると即断されるこの即断によって「根の国」は「黄泉國」を指すという通

念が成立したと思われる。

しかしながら、そう考えることはまず次の三点において実は理屈に合わない。

第一に、古事記の文脈では、須佐之男命の誕生は、伊邪那岐が伊邪那美との決定的な決裂のあと、からくも「黄泉國」を脱出し、「黄泉國」で身に染ませた死穢の穢れを禊した際に、いわば、伊邪那岐の単性生殖として彼の身体（両眼と鼻）から天照大御神と月讀命（月讀尊）とともにもたらされたものであり、それゆえ彼は元来的に《母無し児》である。つまり慕うべき母がそもそもいないはずなのである。

また第二に、もし「根の国」が「黄泉國」ならば、そこは腐乱する死体の惨状をあからさまにする「凶目き汚穢き處」なのであるから、たとえ元来は《母無し児》であった須佐之男命がいまや「妣の国」を思慕するに至ったとしても、はたしてほんとうにそこへ移り住むことを欲したのか、疑問とならざるを得ない。

そして第三に、記紀の全体をいくら探しても、須佐之男命がその後かかる死穢の国としての「黄泉國」の住人になったとか、あるいはその主になったかの記述は一切ないのである。確かに古事記において、次の箇所、大国主神が

彼を嫉妬する八十の兄弟神の謀殺の企てを逃れようとして「須佐能男命の坐します根の堅洲国に参向ふべし。必ず其の大神、議りたまひなむ」と述べる箇所があり（そこで大國主神が須佐之男命の娘の須勢理賣命を妻とする⁽⁸⁾）、その国は後に彼が王となる出雲を「黄泉比良坂」（かの伊邪那岐と伊邪那美とを隔絶した）によって隔てられると書かれる。⁽⁹⁾とはいえしかし、ここで重要なことは、この「黄泉國」であるとおわされている「根の国」はなんらくだんの死穢の国としては記述されていないことである。

すると次の問いが生まれてくる。

まず、かの伊邪那岐と伊邪那美との離別のくだりは記紀においては次のように描かれるほどに敵対的な結果に終わるものであった。すなわち、「天神」の下に「大八島國」（日本國）を生みだす造物神としていわば「二者一組」的な双神の絆を結んでいたはずの伊邪那岐と伊邪那美とはくだんの「黄泉國」の出来事——いまや「黄泉國」の住人となった私の姿を見るなという伊邪那美の切なる願いを裏切つて、その腐乱する死体としての姿を見る——によって、伊邪那岐は恐怖と嫌悪に駆られた逃亡へと向い、他方伊邪那美の方は約束を破られ恥ずべき姿を見られたとの激しい恥辱と怒りに包まれ、伊邪那岐を討つべく「千五百の黄泉

軍を副えて追う」に至り、かくて両者の関係は相愛から一転して「族離れ」・「族負けじ」という互いの「族」⁽¹⁰⁾ 國を賭けた争闘に成り果てる。伊邪那美が離別（絶妻之誓建し⁽¹¹⁾）を口にする伊邪那岐にまず「愛しき吾が夫君し、如此言はば、吾當に汝が治す国民、日に千頭縊り殺さむ」といえば、伊邪那岐は日に千五百名を産むと言ひ返し、事実そうなたとされるほどの（これが同時に人間の生死の神話的起源となる⁽¹²⁾）。

しかしながら、両者がかかる敵対に終わる離別の物語と、後に須佐之男命が「妣の国根の堅洲国」への思慕を語る物語とは、一見一続きの同一の物語のなかにあるように見えて、実は別な二つの物語があたかも一つの同一の物語であるかのように接合されたものではないか、という疑問が。

注目すべきは次のことである。かかる疑いの下に目を日本書紀に転じると、そこには古事記と同一の物語を記述するいわば正伝があるのは勿論であるが、しかし、それとは異なる異伝もあり、その一つでは、須佐之男命を生んだ伊邪那岐と伊邪那美が須佐之男命の性格が「残ひ害ることを好む」ことを危惧し怒り、いったん任せた「宇宙」⁽¹³⁾ 國の統治の任を解き、「極めて遠き根の国」の統治者へと彼を